

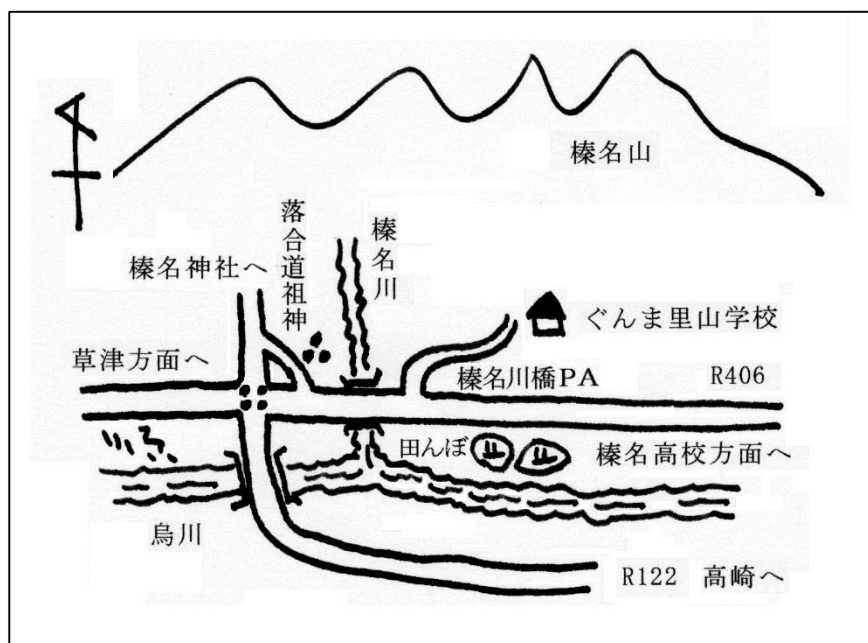
さりげないスナップ写真のすてきな笑顔のように  
群馬の教育や文化の話題を普段着のまま紹介するシリーズ



烏川の河川敷に子どもたちが苗を植えた田んぼが2枚ありました。

高崎市から烏川左岸を走る国道406号を車で西に向かうと榛名川橋手前に広い駐車場、榛名川橋パーキングエリアがあります。榛名高校から5kmほど進んだここは旧榛名町の西端。橋を渡ると旧倉渕村という地点です。目に入るのは緑の山と烏川の豊かな水、梅雨の晴れ間の明るい空。自然があふれています。この駐車場から坂道を上るとすぐに「ぐんま里山学校」があります。山村の農家のたたずまいを見せていました。今回は、コロナ禍の中で学校に行きづらいつ感じている子どもたちが集うというこの魅力的な「学校」取材しました。

雨上がりの畑で少年が一人、ジャガイモを掘っていました。ブルーシートテントの下では何人かが折り紙を折っていました。スタッフと竹を割っている男の子もいました。



少年が一人でジャガイモを収穫していました。

## 7人の子どもたち

この日はぜんぶで7人の子どもたちが活動していました。折り紙で鶴を折っていましたが、よく見ると複雑な翼をもっていました。年上の少年が年下の子に教えていました。



## 竹を割って弓を作る

竹を使って弓を作ろうとしている少年がいました。太い孟宗竹を弓の長さで切ろうと試みましたがなかなかうまくいきません。切ったあとナタで竹を割ります。見ていてハラハラしましたが、スタッフのお兄さんがナタと木槌の持ち方を教えてくれました。そのときお兄さんが竹を支えてくれましたが、それ以上の細かいアドバイスを投げかけることはありません。もう一人の少年が順番を待ちながら真剣な顔つきで手順を観察しています。



## 弓の強さは弦の張りの強さで決まる

竹に錐で小さな穴をあけてそこに弦になるたこ糸を通すのは難儀したけれどそれを乗り越えたらあとは楽だった。脚で踏んで弓をたわませる姿はまるで本職の技を見るようでした。これは誰も教えていませんでしたからおそらく自分で考えたのでしょう。



## 的も手作り

弓で矢を射るときの的がすでに作られていました。私たちが訪問する前の午前中からしっかりと準備されていたようです。的の裏には、倒れないように支えがありました。すべてが子どもたちのアイデアです。



## 気分は那須与一かウイリアムテルか！

いよいよ矢をつがえて射るときがきました。体は小さいけれど弓は十分に強い。弓を引いて引いて的をねらってねらってまたねらってひゅっと放つ。見事命中！とはいきませんが弓矢作りは完了しました。うまくいかないことを乗り越えてここまでたどり着いたという達成感が顔に表れていました。

## ◆◆◆◆ 「主体的に」「考えて」「行動する」力を育てたい ◆◆◆◆

ぐんま里山学校を運営している落合哲郎さんから話を聞きました。

### 開設のきっかけは？

子どもたちの成長に学校教育、家庭教育などのほかに地域で様々な体験を支援する社会教育が大きな役割を果たすと学生の頃から考えていました。特に野外活動を経験するなかで多くのことを学ぶことができます。山や川、畑や田んぼ、竹藪、梅林を駆けめぐりながら、鳥や魚、イノシシや季節の花に出会い、どろんこになりながら、困難に遭遇して解決策を考え、協力して乗り越えるという経験は、「主体的に」「考えて」「行動する」力やコミュニケーション能力を高めることにつながります。これこそが「これからの時代を生き抜く人」になる力だと言えます。

そんな取り組みを可能にする場所を探していた2年前の秋にこの古民家に巡り会い、「ぐんま里山学校」が生まれました。最初は建物の内外が荒れていて修理や敷地に繁茂した雑草、篠藪の除去に追われましたが、豊かな自然環境に助けられて数人の子どもを受け入れていました。



篠藪を刈り払ったらあらわれた鶏舎

### コロナ禍の中で

その年が明けるとコロナが押し寄せてきて学校生活に暗雲が立ちこめると、不安や窮屈さから学校に行きにくくなったという話や、小学校に入学した直後から家庭での学習が主体になり、学校が再開してからの授業になじめなくなった、という話を聞くようになりました。以後、口コミでここを知ってやってく



る子どもが増えてきました。今日は7人の子どもが来ていますが、他にも問い合わせがあり、私たちの取り組みに期待する保護者は多いと思われます。しかし、スタッフの数も限られているので、責任を果たせる範囲に限り平日の火・水・木のみ受け入れています。

### 子どもたちの一日の行動は

9時30分 登校

始まり・今日の相談(やりたいことなど)

自由な遊び・学び・Myプロジェクト

昼食(お弁当)

時間はそのとき次第、活動に応じて自分が取りたいときに食べます

自由な遊び・学び・Myプロジェクト

片付け・掃除・振り返り

15時30分 下校

基本的な流れはこのようなものですが、参加した子どものやりたいことを聞いて決めています。もの作りにじっくりと取り組む日もあれば、歩いて近くの山や梅林、牧場などに出かけることもあります。料理の好きな子はインターネットでレシピを調べて料理をしたり、野菜の植え付け、田植えをしたり、火起こしをしておやつを作ったりしています。季節に応じてさまざまな自然体験ができます。これからの季節は川へ行くことが多くなります。不登校の子どもたちにとっては家から出て太陽の光を浴びることは健康な心と身体づくりにとても大切です。

## 子どもたちの背景と変化

子どもたちがここに通いたいと思う背景には、「新型コロナによって学校が行きにくくなった」「友達関係がうまくいかない」「いじめられた」「学校に行く意味が分からない」「行っているけど好きじゃない」などさまざまです。どれも簡単に解決できる問題ではありません。喫緊の課題は健康な心と体を回復することと考えて支援します。

「里山学校から帰宅すると、とても生き生きした表情になります」という話を保護者から聞きます。私たちの目にも、太陽の下で身体をたくさん動かすと心も解放されて、心身ともに健康になっていく姿が見えます。継続して参加している子どもは、自分のやりたいことを見つけて、それを調べたり考えたりしながら「自分で考え」「自分で行動する」ように変化して、そのような場面がどんどん増えています。子どもや大人との関わりも増えて会話する機会が増えるとともにコミュニケーション能力を高めています。昨年度、毎週参加していた子どもで、今年の春から学校に通い始めた子が数人います。里山生活がさまざまな力を育んだのではないかと思います。



鶏の餌にするひまわりの種の殻をむく子ども

## 課題はたくさんあります

ここに通ったことを、在籍する学校の出席扱いにすることが望まれますが、必ずしもすべての学校で認められているわけではありません。引き続き、教育委員会に働きかけていきます。

人もお金もありません。通いたいという声は増えていますがスタッフが限られている現状では、残念ながら要求をすべて受け入れるわけには行きません。不登校の問題をかかえる家庭にあまり大きな経済的負担をお願いすることもひかえたいと考えています。しかし、子どもたちへの支援の質を確保することは譲れない課題です。ボランティアさんの無償のサポートやスタッフの持ち出しでなんとかしている状況です。夏休みには平日の受け入れを中止し、「古民家キャンプ」を開催し、一定の利用料金をいただいています。ぜひ多くの方々に利用していただけるようお願いいたします。また、ホームページで支援のお願いをしていますのでごらんになってください。よろしく申し上げます。



修理を経てよみがえった古民家が活動拠点

**取材を終えて** 落合夫妻には忙しい中を取材に応じてくださってありがとうございました。それにしてもいろいろな点で大変な事業を展開されていると驚きました。子どもたちをあずかることの責任の重さははかりしれませんから。それにもかかわらず、事業を進める上での教育観には揺らぐところがありませんから、自信をもって取り組んでいることが感じられました。お二人の「子どもと関わるのが楽しい」という言葉に胸を打たれました。子どもたちもお二人の思いに信頼を寄せながら通っているのでしょう。しかし夫妻の堅い使命感の前に立ち塞がる財政上の課題はあまりに大きいように思えました。さまざまな形で支援の手が届くこと、お二人を支えるボランティアの方々、夫妻の幼子の世話をするご家族の健康を願って止みません。

《取材・撮影・編集：大山仁・加藤彰男・坂田尚之・倉林順一》